『死亡事故ゼロ二千日』

月潟中学校一年　鷲尾　徳之

ぼくは、月潟村が死亡事故ゼロ二千日を達成してとてもうれしいです。こんなにすばらしい記録は、各地域の市町村をみてもそうつくれるものではありません。その点、月潟はすばらしいと思います。

この記録を支えてきたのは、月潟村の人々がいつも「事故はいやだ」という気持ちを常にもっていたからだと思います。

ぼくは前に一度、あやうく事故になりそうなことがありました。そろばん塾の帰りのことです。

「はやくかえろ」と、ぼくの友だちが言ったので、

「じゃいこう」ということで、友達と集団で、自転車で帰りました。そのと中のことです。突然だれかがぼくをおいこそうとしたのです。ぼくの自転車のかごと相手のどこかが、からまってしまいました。

「うわっ」と、さけんでぼくはころびました。その時ぼくは無意識のうちにハンドルをつかんだようで、アスファルトに顔をこすりつけ、そのままひきづられて行きました。

気がつくと、ぼくの顔は半分は血にまみれていました。とその時「ピィーピィー」と車が後からすごいスピードでやってきたのです。

「うわっ」

「キィー」と、車は、音をたててとまりました。

このとき味わった恐怖感は一生忘れないようにしよう。

こういう出来事があって以来、自転車を安全に乗ることを心がけています。

「安全第一」という言葉がありますが、まさにそのとおりです。まだまだぼくは、自転車にかかわるこういうことが数多くあります。気をつけなければならないと思います。

もうこういう事故は、二度とおこしたくありません。事故をおこさないためにも「安全第一」という言葉をいつも心のどこかにしまっておかなければならないのです。

死亡事故ゼロ二千日、なかなかできることではありません。しかし、僕の住んでいるこの月潟村は今、その記録を達成したのです。

『死亡事故ゼロ二千日を達成して』

月潟中学校一年　諏訪　里枝

私は、「死亡事故ゼロ二千日」という言葉を、他の市町村の人たちに自慢してもおかしくないと思う。今、新潟県内でも一年間に百件以上もの死亡事故が起きている。けれども、月潟村では、約六年間の間一つの死亡事故も起こっていないからである。

では、なぜ、月潟村は、起きないのか。それは、村民みんなの交通事故防止への協力や、事故を起こさないための一人ひとりの努力があるからだと思う。もし、村民一人ひとりが事故防止に無関心で、一つもの協力をしてくれなかったら、「死亡事故ゼロ二千日」などという話は、夢のような話になっていたかもしれない。

だから、事故が起きなかったのは、ただたんに、村がせまくて、人口が少なかったためだけではなく、村民の協力があったからこそ「死亡事故ゼロ二千日」というすばらしい記録が実現出来たのではないだろうか。

けれども、死亡事故ゼロ二千日という記録を達成したからといって、これで終わりだと思ってはいけない。これから先のことはどうでもいい、などとは考えないでほしいと思う。

『おそろしい交通事故』

月潟小学校六年　金子　雅美

私は、今から二年くらい前に、自転車に乗っている時に、バイクとぶつかったことがあります。「止まれ」と書いてある十字路に車が止まっていて、左右があまり見通せなくなっていました。

私は、「こんないなか道はそんなに車は通らないだろう」と思い、そのまま、進もうとすると、右からバイクがきて、ぶつかってしまいました。バイクも、そんなにスピードがなかったので、タイヤが私の足にぶつかったぐらいでした。

でも、その時足は、むらさき色になりました。バイクの人は、「だいじょうぶらかね」と聞きました。私はとても痛かったけど、私が左右の安全をたしかめずにとび出したのが原因なので、「はい。だいじょうぶです」と言いました。

また、私は、女子高生が車にひかれるしゅんかんも見たことがあります。女子高生がちょっと道路に出た時に車がきて、はねられてしまいました。その人の顔は、すごくまっ青になっていました。血は出ていなかったのですが、内出血をしたのだと思います。

私は、「あの人は死んでしまうのかな」と思いました。

私は、ちょっとの不注意が、

大きな事故につながるのだと思います。だから、子供でも大人でも、一人一人が注意して行動すれば良いと思います。

『交通安全について』

月潟小学校六年　小林　麻美

私のお父さんは、交通指導員です。だから日曜日など、お父さんといっしょに、デパートなどへ、車に乗って、でかける時は、いつも横断歩道の渡り方など、交通安全のことについてお父さんは、話をしてくれます。これは私にとってもありがたいことです。

ずっと前の日曜日親せきの家に行ってきました。その帰りに一本道を通っていたら、二台の車と二、三人のおまわりさんがいました。お父さんが、「後の車が前の車にぶつかったんだなぁ」と言いました。

私は、いつもお父さんが気を付けて、車を運転してくれるので安心して乗っていられます。

今日（五月十一日）の朝にバスていの所で、バスの来るのをまっている時、後から車がきました。よそのお母さんが、「あぶないから出るなね」と言っているのに妹の真理子が、道の真ん中に出たので、後からきた白い車が、「ピッピー・ピッピー」と音を鳴らしました。妹は耳をおさえてびっくりしていました。私は心の中で「真理子のバァカ」と思っていました。

私はときどき中之口村に買い物に行きます。と中には大通りがあり車がたくさん通っています。横断歩道で手を上げると、車はいつも止まってくれます。「ありがとうございます」と言って私は、いつも通ります。

これからも交通安全に気を付けていきたいと思います。

車を運転する人は、常にどこかから子供が出てくるのだと思いながら、またスピードを落としながら運転していればいいし、子供は、ボールが道路に出ても、三秒待つゆとりを持って落ち着いて行動すればいいと思います。

『事故死ゼロ二千日達成にあたって』

月潟中学校二年　小林　美和子

「事故死ゼロ二千日達成」とてもすごいことだと思う。

私が約三年住んでいた札幌では考えられないこと、ありえないことだ。札幌でときどき聞く急ブレーキの音。道に黒く痛々しく残っている急ブレーキの跡。このようなものは今、私が住んでいる月潟村にはない。また、黄色から赤へ変わる瞬間に、ものすごいスピードで走り去る車も。車だけでなく、人も信号を無視する。それがいつも子供に交通安全を言って聞かせる母親でさえも。こんなことが、しょっ中目についた札幌。いくら「制限速度は…。」などと言っても効果があるわけがない。現実が現実だから。やろうやろうと口先ばかり。その点月潟村は違う。ある時、道を歩いていたら、お孫さんを連れたお年寄りと出会った。そのお年寄りは、口ぐせのように、

「道へ出ると危ない、危ない」と言っていた。それに対し小さな子も、素直に道の端へ来る。朝、登校するとき、一列に並んでいた小学生。口先だけでなく実際に行っている人達、これが違う所であり、又、二千日が達成された理由だと思う。

幼稚園のころ交通事故に遭ったことがある。急に飛び出してしまったのである。

「あっ!!」

と思ったがもう遅い。あっという間にはねられてしまったのである。このおかげで約三か月入院していた。入院していた間中、どうして飛び出してしまったのか悔まれてならなかった。

日目指して一人一人が注意して、がんばって行こうと思います。

退院した後、交通安全には自分なりにしっかりやってきたつもりだ。だが、時々、事故の恐ろしさをフッと忘れてしまう時がある。退院した後から事故とは無縁だったからだと思う。そのたびに、事故の恐ろしさ、足の骨を折ったために、正座がきちんとできるようにと痛み、苦しみをこらえて練習してきた日々を、思い出し、常に交通安全を心がけている。

死亡事故ゼロ二千日を達成した月潟村。この村の中で事故が起こるわけないと心のどこかで楽観的に考えている人はいないだろうか。そんな心が少しでもあったとしたら、事故は簡単に起ってしまう。私はそう思う。

二千日だとうかれてばかりいて、事故が起きてしまったら大変だ。交通安全をいつも気をつけて、三千日を目ざし、頑張ろうと思っている。